

鎌倉の取組紹介

鎌倉の取組紹介

令和3年11月18日（木）13：30～14：30

共感を力に、共に生きる文化を鎌倉から
～鎌倉海藻ポークの一步～

矢野 ふき子氏 料理教室「鎌倉ダイニング」主宰・鎌倉漁業協同組合食品アドバイザー

鎌倉リビングラボの挑戦

～産官学民で地域課題から新しい価値を創り出す～

秋山 弘子氏 東京大学名誉教授・高齢社会総合研究機構客員教授

青木 清氏 NPO法人タウンサポート鎌倉今泉台副理事長

秋山 恵氏 （株）イトーキ商品開発本部先端研究統括部先端技術研究所所長

共生社会が生み出す well-being

～共生社会の実現を目指す鎌倉市の取組より～

松尾 崇氏 鎌倉市長

共感を力に、共に生きる文化を鎌倉から

～鎌倉海藻パークの一步～

発表者 矢野 ふき子 氏



【ナレーション】「共感を力に、共に生きる文化を鎌倉から～鎌倉海藻パークの一步～」相模湾に面した神奈川県鎌倉市は、歴史ある寺社と由比ヶ浜をはじめとした美しいビーチを持つ人気の観光地です。鎌倉の海は豊かで、天候によっては浜辺に多くの海藻が打ち上げられています。けれども、鎌倉近辺では日常的にカジメやアラメを食べる習慣はなく、ましてや打ち上げられたものには苦情の原因となり、日々廃棄されています。鎌倉在住の料理家 矢野ふき子さんは、捨てられてしまう海藻を使って、新たな取組ができないかと考えました。

そして、彼女が行き着いたのは、海藻を飼料にすること。その飼料を豚の餌にし、おいしい、特色のある鎌倉ブランドの豚肉を生産、販売することでした。捨てられていた海藻という地域資源を生かし、その海藻を飼料にする工程を障害者の方々の仕事にできないかと考えたのです。

幼い頃は引っ込み思案、泣いて、押し入れに閉じこもる、そんな矢野さんを変えたのは、料理との出会いでした。10歳の頃、誕生日に

料理の絵本を買ってもらったことがきっかけでした。言葉で伝えられないことも、料理を通じて自分を表現できると気づいたこと、その経験が矢野さんの料理家の原点だったといえます。

そして、自然豊かな鎌倉で料理教室を主宰し、活動しているうちに、シラス漁で網にかかったカタクチイワシが市場に出回らず、廃棄されていることを知り、心を痛めました。そこで矢野さんは、鎌倉漁協に行きます。

【矢野】 カタクチイワシが捨てられちゃっているんだったら、漁協で鎌倉アンチョビにして販売すればいいじゃないですかって、言いに行ったんです。

【インタビュー】 よく言いに行きましたね。

▼**矢野：**でも、捨てられちゃってるというのは、ちょっとやっぱりもったいないし、残念だし、せっかく漁師さんがとったものなので、そこはどうか生かしたいなって思いました。

【ナレーション】 矢野さんが命あるものを大事にしたいと考えるようになったのは、短大の卒業論文でした。

▼**矢野：**卒論です。全ての生き物には神様が宿っているという考え方を、卒論を通じて知ることができて、いろんなものをいとおしく感じる。人の育てたお野菜に関しても、人がとってきたくれた魚に関しても、育てている牛や豚、何に関しても、いとおしく感じる。そこを卒論で学んだような気がします。

【ナレーション】 鎌倉アンチョビをきっかけに、鎌倉漁業協同組合の食品アドバイザーになった矢野さんは、海辺に行くようになり、

漁師さんとも会話を交わすようになります。そして、海が荒れた次の日には大量の海藻が流れ着き、その海藻は廃棄されていることを知ります。関西や東北では、おかずとされているカジメやアラメといった海藻も、鎌倉では食す習慣がありません。

▼矢野：海藻はミネラルが豊富だったり、コンブのように旨味が多かったですよね。例えばイベリコ豚はドングリを食べておいしくなるし、日本ではお茶っ葉を食べておいしくなる豚さんもいます。もともと豚は食べるものによって肉質が変わるということは知っていたので、海藻を豚の飼料にしたら肉質とか味によい影響が出るのではないかなというふうに考えたんです。

【ナレーション】 多角的に物事を考える矢野さん、餌で豚の肉質が変わることは知っていても、飼料のことは全く知らない。自分で海藻を拾い、干して、さらに低温のオーブンで焼いて乾燥させ、粉末の飼料を作ることから始めました。この飼料を持って、神奈川県畜産技術センターに行ったところ、厚木市飯山で養豚業を営む臼井欽一さんをご紹介してもらったのです。臼井さんは、その地域の誇りとなるような豚を飼育したいと、常日頃から考えている養豚家でした。臼井さん自身、過去に海藻の飼料化に取り組んだこともあり、実際の海藻の飼料を目の前に、即答でご協力いただけることになったそうです。

▼臼井：同じ白でも、比べてみるといろいろ違うんですね。ですから、皆さんもスーパーとか百貨店とか、お肉売り場、お肉屋さんに行ったときに、肉の油の白さというのを気にして見ていただくと、いろんなお肉が並んでいると思いますけれども、白さが違うんですね。光線の具合とかもありますけれども、より白い肉のほうが、お肉の雑味は少ないです

ね。お肉って、やっぱり獣臭とかあったりとか、いろいろ香りがよくも悪くもあるんですけど、白い油のお肉のほうが、そういう獣臭とか、そういうのは少ないのは間違いないですね。

海藻ポークについては、真っ白な油を目指してやっていますので、その辺は食べるときに見ていただけると、すごくありがたいかなと。100グラムの袋に入っていますけど、その100グラムというのは、乾燥になっていますけど、本当は1キロぐらいあるんですね。ですから、それが100個あると10キロで、海藻だと100キロということになりますから、本当に10キロという重みでも、本当に多くの方がね、もともと100キロですから、その手間暇かけて持ってきていただいているということは、本当にすごくひしひしと伝わってきますね。

【ナレーション】 こうして鎌倉の海藻を餌にしてくれる養豚家は見つかりましたが、もう一つの問題がありました。それは漁業権です。海岸に流れ着く海藻であっても、漁業権が存在します。矢野さんは鎌倉漁協に出向き、相談しました。

【男性】 寄ったものだけど、一応漁業権がある。許可取って拾うんだったら構わないだろうってね。

▼矢野：今、1,000円しか持ってなかった。ごみになっちゃうんですものね。

【男性】 ごみになっちゃう。

▼矢野：もったいないですよ。

【男性】 もったいない。

【ナレーション】 そして、原さんは鎌倉漁業協同組合から、障害者の方々に海藻の回収許可証を発行してくれたのでした。海藻の飼料化でネックになるのは、塩分そして重量です。工業的な手段で飼料化しようとする、海藻に付着している塩分が抜けず、塩辛過ぎて餌

になりません。海で砂を落とし、さらにそれを洗淨し、塩分を真水で洗い流す必要があります。

そしてもう一つの問題は重さです。水分を含んだままでは、腐敗するスピードが速く、仮にそれをすぐに豚の餌にできるとしても、重量が大き過ぎます。

そのとき、矢野さんが考えたのは、障害者の方々のお仕事にならないかということでした。活動をするのであれば、その一部を障害者の方々にお分けしたい。鎌倉アンチョビの説明書の折る作業を依頼していたこともあり、早速料理教室の生徒さんを通じて新たに福祉施設を紹介してもらいました。障害者の方々は、海藻を回収、洗淨、干し、粉碎をして、その鎌倉海藻飼料を臼井農産鎌倉事業所に販売します。布袋に入れた乾燥海藻を、車椅子の車輪で細かくしたり、手回しシュレッダーで細かくしたり、金づちで叩いて細かくしたり、コーヒーミルで細かくする方もいます。参加施設は徐々に増え、今では鎌倉の4つの福祉施設が鎌倉海藻飼料の活動をしています。障害者の方々の活動に加えて、2021年の3月からは老人ホームの方々もボランティアで加わりました。

鎌倉の障害者の方々や老人ホームの方々の協力を得て飼料化された海藻を食べて育った豚は、鎌倉海藻ポークのブランド名で販売されるようになりました。精肉の販売は個人会員が中心で、約100名の方々がお客様となっています。今年の11月からは、鎌倉市のふるさと寄附金の返礼品にもなりました。

▼矢野：やはり鎌倉の人たちがみんなで築き上げて、それで水産、鎌倉の事業者たちもいて、これがどこに、どなたのお手元に届いたとしても、鎌倉を感じてもらえたらなと思っています。

【ナレーション】 しかし、流れ着く海藻は全くないときもあれば、回収しきれないぐらい大量に流れ着いているときもあります。障害者の方々や老人ホームの方々の働きを無駄にしないためにも、効率的な豚の飼育が必要になってきます。そのために、臼井農産鎌倉事業所では、毎月決まった頭数を育て、お客様に販売する計画飼育という手段をとっています。

お客様の中には、無印良品を経営する株式会社良品計画もあります。鎌倉に2020年春に誕生したホテルメトロポリタン鎌倉内にあるCafe&MealMUJIでは、鎌倉海藻ポークを使ったメニューのために、毎月2回、4頭の豚を購入してくださっているそうです。

▼木村：まず、この海藻ポークを使わせていただいて、一番感じた違うところは、やはり豚の臭みが全くないということですね。実際に当店では豚汁とかにも使わせていただいているんですが、あくを取る際に油が本当に黄色くない、ほんと透明な、澄んだ油というのがすごくこの豚の特徴だなというふうに思っています。

▼松木：Cafe&MealMUJIという屋号で出店するに当たって、やはり地域でずっと根ざした、20年、30年続くレストランをつくりたいなという思いでオープンをしました。そのときに、やっぱり僕たちは食を伝えるお仕事です。その食のプロダクトとして、商品、食材自体にちゃんと意味のあるもの、こういったものを使いたいなというふうに思っていたので、海藻ポークという取組を聞いて、これは我々が取り組むことで鎌倉市全体、ひいては全国に広がっていく取組になればいいなと思って、導入を決めました。

▼永尾：すごく個人的な思いにはなるんですが、私自身、家族に、障害を持ってい

る妹がいて、そういう障害者福祉の分野に何か少しでも力になれるかという思いを持って、この会社に入った経緯がありまして、その中でこの矢野さんのやっていたりしゃる活動というものにすごく共感しまして、僕はぜひ一緒にやりたい。何か応援したいとか、偉そうなことではなくて、私自身、矢野さんから勉強させていただきたいというふうな気持ちで、松木と一緒に海藻を拾いに行かせていただいたり、碎く作業を見に行かせていただいたりみたいなことをさせていただく中で、ああ、やっぱりこれはやってよかったなと、すごく、一番多分鎌倉の店で誇らしい商品だなと、物販を含めて思っているのです。

【ナレーション】 鎌倉海藻ポークという食材の持つ意味を深く理解している鎌倉のCafe&MealMUJI、メニューに加わったことによって、鎌倉市民、観光客の鎌倉での食の体験は深まります。お客様にはこの味を楽しんでいただきたと、矢野さんはうれしそうに話します。

▼矢野：この鎌倉海藻ポーク、すごく面白いと思うんです。捨てられてしまっている海藻を活用して、障害者の方たちがいてくれて、それを県内の食材で豚を育てたいと思う臼井さんがいて、それで無印さんがご契約してくださって。関係者がいっぱいいて、福祉だけをメインに着目して、これを発信してしまうと、鎌倉海藻ポークの面白みが伝わりきらない。なので、いろんな面から、皆さんにも理解してほしいし、私もいろんな面から発信したいなというふうに考えています。

【インタビュー】 今では、矢野さんと、あと臼井さんをはじめ、畜産の方、水産の方、漁師さんを含め、あと自治体と、あとムジさん、サービス業、観光の面まで、すごい一大プロジェクトになりましたよね。

▼矢野：なっちゃいましたよね。臼井さんのこの鎌倉海藻ポークは、農林水産省の6次産業化の認定を取っているんですけど、水・福・畜連携というのに注目していただいたということもあって、そういうふうな事業って、今までなかったですね。水産と福祉と畜産がつながって何かを目指すということはなかったです。そういう意味で、すごく面白い。皆さんのおかげで、面白い取組になったかなというふうに思います。

【インタビュー】 それは当初から想定していたことだったんですか。

▼矢野：どんどん広がっていると思います。老人ホームの方なんて、ちらっとも思ってなかったし。私がいなくなっても、この事業が進むぐらいに、鎌倉に定着すればいいなというふうに思っています。

【ナレーション】 鎌倉の海岸に流れ着き、廃棄されていた海藻が、1人の料理家の発想と行動で、障害者の方々、そして老人ホームの方々を含めた共生社会をつくり出しました。共感を力に、共に生きる文化を鎌倉から。

鎌倉リビングラボの挑戦 ～産官学民で地域課題から新しい価値を創り出す～ 発表者 秋山 弘子氏・青木 清氏・秋山 恵氏



▼**比留間**：皆様こんにちは。鎌倉市共生共創部の比留間です。今回、地域共生社会推進全国サミットにおいて、鎌倉リビングラボを紹介させていただけることを非常にうれしく思います。鎌倉リビングラボは、市民の皆さんが主役となり、産官学が連携し、「だったらいい」の暮らしや地域をつくり上げる活動を行っています。本日はここに産・官・学・民のメンバーで説明していきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、早速鎌倉リビングラボのコーディネーター役を務めている東京大学から、秋山先生、よろしくお願いします。



▼**秋山 (弘)**：比留間さん、ありがとうございます。皆さん、こんにちは。東京大学の秋山です。鎌倉リビングラボについて話をしたいと思いますが、まずは本日ご紹介するテレワーク家具開発の取組についての紹介動画がございますので、ご覧ください。

▼**田島**：この住宅地は鎌倉市でも一、二を争う高齢化率ですね。将来的に人口も減るとか、この住宅地が生き残ることは一体どうしたらいいのか、このまちで子育て、環境のよい場所で暮らしていく。働き方の改革に伴って生き残れる可能性は十分にあるというふうに信じています。

▼**吉田**：リビングラボは産・学・官・民という4者がとても絶妙なバランスで入ってやるようになっておりまして、多様な参加者が参加できるオープンイノベーションのプラットフォームというふうになります。産学官民それぞれがその強みを生かすときに、自分ごととして捉えて意見を出したり、対等に、フラットにお話しできるということがうまくいっている秘訣なのではないかと思います。

▼**藤本**：まずニーズがあるのかどうか、あと、そこに我々が解決できる課題があるのかどうか。ヒアリングを行いました。我々が持っていた仮説が間違っていたこともよく分かって、また皆さんが持っている課題というのも見えてきたので、じゃあテレワーク家具、実際につくろうかと。

▼**柴田**：いや、今でも覚えているけど、びっくりした。だって、段ボール職人だもの。段ボールですからね。段ボールであそこまで思い描いていたものをちゃんとやって、可動部分が動くんです。地域住民が何かをニーズを引き出して開発するというのは、形をつくってみると、メーカー側のプロダクトアウトではなかなか発想ができないことで、それがマーケットインで普通に来るのとも、やっぱりちょっと

違うと思うんですね。

▼平山：すごく気楽に、言いたいことだけ言って、できてきて、ああ、すごいですねというて、またこうやって、またイトーキさん、上げてくださっていたんですね。

▼青木：やっているうちに皆さんが単なる参加者じゃなくて、開発者の一員になっているんですね。自分の意見がどういう形になるか、それは一番のモチベーションなんです。企業だけでは出てこない意見、住民主体の生活者の意見、これを酌み取れるというのは、非常に大きなリビングラボの価値だと思いますね。

▼吉田：いろんな企業に入ってきていただいて、本当に必要なものを、それぞれの強みを持って作っていくことができるというのが、これからの展開になっていくのかなと思っています。

▼秋山（弘）：ご存じのように、少子高齢化や人口減少には課題が山積しています。と同時に、人生100年と言われる長寿社会には、私たちの祖父母の世代には想像もできなかった新たな可能性が多くあります。解決すべき課題と新たな可能性が多いということは、イノベーションの宝庫とも言えます。リビングラボは生活者を核として、産・官・学・民が共に取り組むオープンイノベーションの場です。鎌倉リビングラボは、地域住民がまちの課題や望むまちの未来やライフスタイル像をワークショップなどの対話から抽出します。それをかなえる物やサービスを企業や行政、大学とともに試作し、それを日常生活の場で使ってテストして、住民の真のニーズを引き出すことによって、生活者目線に立った物やサービスの開発・改善、また望ましい社会の仕組みづくりにつなげる活動です。

4年前に高齢化が市内でも進んでいる郊外型の住宅地である今泉台地域をフィールドに

取組がスタートしました。取組は大きく、住民課題、行政課題、企業課題のそれぞれが発点となって、3種類の活動が行われております。今日はそのうち2つの事例をご紹介します。

また、平成30年にはリビングラボ活動が盛んな北欧のスウェーデンと共同研究を行っていた経緯もあり、スウェーデンの国王ご夫妻が今泉台に視察にお越しくださり、国際的にも注目されている取組となっております。

私からは、鎌倉リビングラボの概要について、ごく簡単に紹介させていただきましたが、具体的な取組をイトーキ株式会社の秋山さん、藤本さんからお話しいただきたいと思います。秋山さん、藤本さん、よろしくお願いいたします。



▼秋山（恵）：秋山先生、ありがとうございます。私たちイトーキの秋山と藤本です。私たちからは、鎌倉リビングラボで取り組みましたテレワーク家具の開発のプロジェクトと、今後の展開についてお話しさせていただきます。

▼藤本：株式会社イトーキの藤本です。私どもの取組は、「様々な世代に優しいまちへ」という地域課題を出発点にしてスタートいたしました。活動拠点として選んだまちは、駅から大分時間のかかるエリアでありまして、テレワーク家具を開発することで、住んでいるまちの中で働くことができる、そのような地域を目指してこの取組をスタートしてまいりました。

今回この取組では、子育て世代や実際にテレワークをしている現役世代の方、またはひとり暮らしの若者といった、様々な環境の住民の方にご参加いただき、複数回のワークショップを経て、その中からの対話によって、ニーズや価値観を深掘りして、それらを反映させた家具を開発いたしました。

このように、皆さんの対話から生まれた、このテレワーク家具が発売されたという取組は、日本におけるリビングラボ活動の初の事例で、商品化第1号となっております。テレワーク家具が開発されてから、さらにその先に新しい働き方を模索する、わくわくワークプロジェクトが始まっておりますので、そちらについては秋山よりご紹介させていただきます。

▼秋山（恵）：イトーキの秋山です。テレワーク家具の開発を通じまして、自宅や会社から外に飛び出すということに価値を覚えております。現在は新しい、わくわくする働き方について、わくわくワークプロジェクトで模索を行っています。リビングラボでは住民が開発者となって、自らの「働く」や「暮らす」の中での価値観や経験に伴った様々な意見やアイデアがオンラインの中でもワークショップでユニークなものがたくさん出てくるというのが印象的でした。

次は、実際に住民目線でのお話を青木さんから伺いたいと思います。青木さん、よろしくお願いいたします。



▼青木：秋山さん、ありがとうございます。NPO法人タウンサポート鎌倉今泉台で鎌倉リビングラボを担当している青木です。鎌倉リビングラボに参加した方から話を伺うと、自分の生活だとか意見とかアイデアが実現されていくところに、非常に楽しい感じを持ったみたいですね。このイトーキさんのテレワーク家具開発でも、試作品が完成し、実際に目の前に現れたとき、皆さんから思わず「おう」という声が出ましたが、自分たちのアイデアが現実の形になるということが大きな喜びになっているようです。

そして、自分がこの地域課題の解決だとか、あとは社会への貢献、役に立つ、そういうところに非常にやりがいを感じているという方は多いですね。こういう方々が楽しいと感じていただけるためには、自分たちが出した意見やアイデアのフォローアップだとかフィードバック、これがとても重要になってくると思います。「ジブンゴト化」ということは、自分の意見やアイデアがきちんと実現していくとか、どんなふうになっているんだろうというところを、きちんと示してあげることがポイントかなと感じています。これがないと役に立っているという実感が薄く、これからも続けていこうという気持ちが失われていくようです。まちには多様な価値観や環境で暮らしていて、そのような方々が主役となって、どんな人でも輝ける場がこのリビングラボだと考えています。自分たちでできることがある。自分たちでしか解決できないこともある。それができて、それが「ジブンゴト化」なんですけれども、それができたら非常にまちはよくなると感じています。

これまで今泉台での物の開発についてお話ししてきましたが、鎌倉市では政策というサービスを住民目線で立案する取組もチャレンジ

されているようなので、鎌倉市の比留間さんからお話をいただけますか。

▼**比留間**：はい、青木さん、ありがとうございます。鎌倉市では、我が国がこれから迎えるsociety5.0の社会、誰一人取り残すことなく、そこから生まれる価値を皆が享受できるよう、デジタルリテラシーの格差解消を課題として捉えています。

今、新型コロナウイルスの流行で様々な行動が制約を受け、さらに格差が広がる傾向にあります。このため、様々な年代がデジタル機器を通じてつながり、支え合う環境づくり、特に高齢者の方々を中心とするデジタルデバイドを解消し、コミュニティの再構築、さらには人々の暮らしをより豊かにしていくことを目指した取組をスタートしています。

具体的な取組については、実際に地域に入って住民の方々と一緒に取り組んでいる本多より紹介いたします。

▼**本多**：皆さん、こんにちは。鎌倉市政策創造課の本多です。このプロジェクトでは「玉縄台でデジタルライフを楽しむ」をテーマに、鎌倉リビングラボの拠点を広げる第一歩として、玉縄台という地域をフィールドに活動し、住民の皆さんが主役になって、大学と行政と一緒にデジタル機器と楽しく付き合う方法を模索してきました。

その結果、実際の生活ではなじみづらく、どうしてもその場の一過性のものになってしまうという課題があったスマホやパソコンの教室を開催するという方法ではなく、困ったときやちょっとしたときに身近な人に聞くことができる地域コミュニティでの教え合いへの関心が高いことが分かりました。

そこで、まずは地域のキーとなる住民メンバーがオンライン会議などを通じて少しずつデジタル機器を覚え、使いこなしていき、メ

ンバー間で教え合うことで、今となってはオンライン会議を当たり前のように使いこなしています。そして、そのメンバーたちが主体となり、広く地域住民に対してデジタル機器の楽しさや利便性を地域生活の中で広め、教え合っていく自主企画がスタートしています。

このプロジェクトでは、年齢に関係なく、デジタル機器との楽しい付き合い方を地域全体で考え、取り組むことで、コロナの影響により毎年恒例のイベントやお祭りができないという大きな制約を受けている中、地域活動の歩みを止めないという課題解決にもつながっています。鎌倉市としては、このようなリビングラボのプロセスを通じて、地域住民の声からつくり上げた取組をさらに質を高め、地域の誰もがデジタル機器を楽しく使いこなすための政策として、様々な地域にも展開していきたいと考えています。

▼**比留間**：本多からは、玉縄台地域でのデジタルデバイドをテーマにした取組を紹介しましたが、鎌倉市では地域の課題を地域で考え、解決していく共生社会を共創する。この鎌倉リビングラボの取組を全市に広げていきたいと思います。近年これまで豊かさの指標とされてきたGDPにかわる指標として、well-beingという表現が使われています。このwell-beingを高めるには、個人の満足度とともに地域の豊かさ、地域との関わりが重要と言われています。地域の「だったらいいな」を実現し、その過程に自らが関わる鎌倉リビングラボは、まさに市民のwell-beingを高める活動ということができます。鎌倉リビングラボの活動を通じて、市民・地域の幸福度を高めていきたいと考えています。

▼**秋山（弘）**：比留間さん、ありがとうございました。これまで鎌倉リビングラボの取組のうち代表的な事例について紹介してきました

けれども、最後は全員で地域課題を解決しながら未来社会、新しい社会をつくっていくための今後のチャレンジをテーマに話し合っていきたいと思います。

今回のサミットは、地域共生がテーマですが、鎌倉市としてはいかがですか。

【比留間】 鎌倉市は、誰もが安心して自分らしく暮らすことができる共生社会を目指しています。多様な価値観や課題を持った方々、男性・女性、年齢、障害の有無、個人の立場に関係なく、誰もが暮らしやすいまちを鎌倉リビングラボ活動を通じてつくっていきたいと思っています。様々な人たちが参画し、議論を重ねるプロセスは、個人個人の価値観の違いなど、新たな気づきを得るきっかけになります。市民一人一人がそれぞれ主役となり、輝くことができる社会を目指し、今後も挑戦し続けてまいります。

▼秋山（弘）：比留間さん、ありがとうございます。青木さんは住民として当事者の立場でもご参加いただいておりますが、住民が自然と参加しているのは、どのような理由があるのでしょうか。

▼青木：楽しく参加ということが一番大きいですね。住民一人一人の価値観やアイデアが反映されたものは、やはりうれしいですね。そして、楽しく参加した住民が地域の課題を「ジブンゴト化」するというのが一番のポイントで、高齢者だけでなく、子育て世代や子供、障害を持った方といった、いろいろな人の課題を地域全体で考えていくことで、この地域はもっとよくなっていくと思います。そこから、きっと自分たちはこの地域で何ができるんだろうと考えるきっかけになるのではないかと思います。鎌倉リビングラボのプロセスを通じて、自ら動き出す住民を増やしていくことが本当に目指したいことだし、今後の

チャレンジですね。

▼秋山（弘）：青木さん、ありがとうございます。住民が開発者となることで、主体的な参加が見られていますが、イトーキさんとしてはこの鎌倉リビングラボに参加して、いかがでしたでしょうか。

▼藤本：これまでの商品開発というのは、主に会社の中で行われてきました。会社から一歩外に飛び出して、地域の方と一緒にニーズとかコンセプトを考えてくると、今まで得られなかったような気づきとか可能性を多く、本当に感じることができました。社会課題の解決に取り組んでいくということは、これから企業が社会から必要とされるためには、とても大切なことであると、そのように考えております。

▼秋山（恵）：働くと暮らす、学ぶが近くなっていく中で、生活の場で主役である住民の方と一緒に考えていくことで、いろいろなアイデアが出てくると考えています。また、自分らしく働ける環境はどのようなものなのか、皆さんが望んでいる暮らしや生活はどんなものなのか、これらを一緒に考え、実践していくことは、ありがたい未来社会の実現にもつながっていくということでもありますし、新しい働き方、新しい価値を生み出すものにもつながっていくと考えています。

一つの企業で解決できることは少なくなってくる中で、産・官・学、複数の企業と連携することで解決していける可能性を大きく感じております。

▼秋山（弘）：藤本さん、秋山さん、ありがとうございます。鎌倉リビングラボは、住民が望む未来社会を様々なステークホルダーが一緒になって生み出していく取組です。社会や地域には様々な人が暮らしており、その人の数だけ多様な課題があります。その課題をみんなで

協力して解決し、誰もが暮らしやすい社会をつくり出していきたいと願っております。

本来であれば、産・官・学・民が立場を超えて、みんなでわいわい楽しくアイデアを出し合って進めたいのが本音です。1年以上、コロナ禍で直接会えず、オンライン中心の状況が続いていますが、またこの写真のように、みんなで集まれる日を楽しみにしています。

私たちの紹介は以上です。本日は動画でのご紹介でしたが、いつか皆さんとお会いできることを願っております。ご視聴いただきまして、ありがとうございました。

【一同】 ありがとうございました。

【司会】 秋山弘子様、秋山恵様、そして青木清様、ありがとうございました。

最後の取組紹介は、「共生社会が生み出すwell-being~共生社会の実現を目指す鎌倉市の取組より~」と題して、鎌倉市 松尾崇市長が発表します。松尾市長、よろしくお願ひします。

共生社会が生み出す well-being ～共生社会の実現を目指す鎌倉市の取組より～

発表者 松尾 崇 氏



▼松尾：鎌倉市長の松尾です。よろしくお願いいたします。鎌倉市の取組の紹介、最後あと16分ぐらいですけれども、お付き合いいただければというふうに思います。よろしくお願いいたします。それでは早速始めます。

共生社会が生み出すwell-beingということで、大きくは3つ取組を紹介させていただきます。

まず1つ目です。「鎌倉市共生社会の実現を目指す条例」についてです。これは先ほどお昼前に流したプロモーション動画でもご紹介しましたので、QRコードで、改めて見ていただければというふうに思っております。それでは、共生社会の実現を目指す条例です。2年前、この条例を制定したわけなんですけれども、きっかけの一つは、冒頭、神奈川県黒岩知事のお話の中にもありましたけれども、神奈川県で起きました津久井やまゆり園の戦後最悪と言われた殺傷事件であります。こうした事件の中では、優生思想というようなものが議論として語られた部分ではありますけれども、そうした社会を決してつくってはいけません。鎌倉からそうした発信もしていきたいということが、一つこの条例をつくる大き

な理由にもなりました。

大切にしたい理念というのは、ここに書いてあります自分らしく生きる、支え合って生きる、自らが望むかたちで社会参画しながら生きるというものです。この前文に思いというものをかなり込めていますけれども、人にとっての普通や当たり前というのは、他人にとっての普通や当たり前とは違うということなどを盛り込んでいます。この市役所の仕事を進めていく中でも、常に共生社会の実現を目指す条例に立ち戻って、様々なものを確認してもらいたいというふうに私は職員に対してよく話をしています。

今日のテーマにもありますけれども、デジタル、スーパーシティですとか、デジタルトランスフォーメーションといったようなことが、今この日本の中で取組が進められるわけではありますけれども、これらは全て手段であって、決してデジタルトランスフォーメーションをやること自体が目的ではないわけです。我々が手段として取り組んでいること、その目的は何かといえば、この共生社会の実現を目指すことです。そのために私たちはあらゆるもの、それはステークホルダーというふうに先ほどの動画の中でもありましたが、産・官・学・民という、こういう連携ですとか、新たなテクノロジー、技術、こういうものをどんどん取り入れながら、共生社会の実現を目指していきたいというふうに考えています。

実現を目指す条例の中で、具体的な取組というところでは、一番上の共生の意識づくりは、

まさにこうした全国サミットも一つではありませんけれども、市民講座や職員研修というようなことなどに取り組んでいるところです。

共生社会とは、改めて全ての人に配慮のある社会、対話による調整ができる社会、支援する人、される人を固定しない社会というふうに位置づけています。先ほどお話にもありましたけれども、支援する人、される人、これは一日にして、一晩にして変わる可能性もあります。昨日まで元気だったかもしれないけれども、病気になって、明日からは支援される人になるかもしれません。そういうところから、こうした考え方を固定化しない社会というところも我々としては一つ目指している姿でもあります。

それから、地域に必要なことということです。困っている方が、困っているということなかなか声が上げられない。それが日本人としての特徴の一つでもあるのかもしれませんが、こうした困りごとということを見える化、可視化するということが地域にとって必要なことであるというふうにも考えております。

それから、昨今、ヤングケアラーですとか老々介護、また障害者を家族に持つ方の支援というようなことなどもクローズアップされる部分ですが、ケアラー支援というところにつきましても、大変重要だというふうに思っています。本人の支援だけではなくて、家族丸ごと支援をしていくという視点とか、また誰でも地域の新たな戦力になるという、こういう認識も同じです。

鎌倉市では、くらしと福祉の相談窓口を開設しました。これはどんなお困りごと、どんなことでも、まずはこの窓口に来てお話をさせていただきたい。その中で、ここで受けた相談ごとをこの市役所の中にきちんとおつなぎ

をする、そういう取組をしました。この相談窓口を開設することによって、昨年と比較して5倍の相談が増えたというようなことがあります。もちろん全ての課題が解決できるわけではありませんけれども、まずは相談を受け止めるということで、市役所としての課題の把握、それから政策づくりということにながてしているところです。

目指したい地域の姿というところは、困っているということを気軽に言い合える、そうした環境づくりとともに、この地域資源の共有、暮らしを支える新たな地域のつながりの構築というところがあります。鎌倉市としては、今、地域共生プラットフォーム、仮称ですけれども、こうした取組ということをしていきたいというふうに思っています。支援できる人が支援できるときに支援する、そういう仕組みづくりということを、より一層進めていきたいというふうに考えています。具体的には、例えば障害児をお持ちのお母さん方が、自分がその子を育てた経験というのは大変だったけれども、それを同じ失敗を繰り返さないでほしい。だから、今度障害児を育てる、そういうお母さんの力になりたい。そんなことを発案されて、学校の中に、もしくは保育園の中にサポーターとして入っていききたい。こんなことを発議をしていただいて、実際に仕組み化してきたというようなことなどもあります。そうしたことを様々な分野で広げていって、それを地域共生プラットフォームということで、支援することを可視化していくことによって、あ、これだったら今の自分にちょっと手伝えるかもしれない。そういうニーズも掘り起こしながら、お互い支え合える、そういうまちを目指していきたいというふうに考えております。

2 番目です。新型コロナウイルスの中での

影響と対応ということで、これはどのまちもいろいろな取組をされているというふうに認識をしておりますが、鎌倉市の取組の一端をちょっとご紹介をさせていただきたいというふうに思います。

このコロナ禍において、先ほどの相談窓口に寄せられた相談の特徴というところにつきましては、世帯全体の課題を相談する場所が見当たらないということや、孤独感、社会的な孤立、つながりを求める過程での生じる怒りなどがあります。

集約していくと、やはりこのコロナ禍で明らかになっていった不安という気持ちです。目に見えないことへの不安、また知らないことへの不安、情報が集まりにくいことへの不安、そういう不安ということが積み重なるということによって、その人自身が様々な健康の課題ということを抱えたり、またコロナの中で収入、住むところ、人間関係、こういうところに課題が生まれてきたというところ。こうした課題に直面していくと、人に対しての寛容さということも失われて、攻撃的になっていくなんていうこともあったというふうに思っています。

市としては、そうした不安や批判、思い込みが人を傷つけることがありますということを書きながら、そうした気持ちということを決して人を攻撃するということにつなげないで、いたわりや思いやりの心を持ちましょうという、こういうポスターを作成をしまして、市内様々なところに掲示をさせていただきました。これは各教育機関なども、とても協力をしていただいて、うちにもこのポスター貼りたいからちょうだいなんていうお声もたくさんいただいたところです。

また、観光客の方には「何々しなさい」というようなことよりも、「こうしましょう」と

いうような、少しやわらかいメッセージで鎌倉に来た方に少し感染予防のマナーを徹底をしていただくなんていう取組もさせていただきました。

コロナワクチン接種につきましては、鎌倉の場合はタクシー券の助成ということをしていただきました。65歳以上の方にこれをお出ししたんですけれども、実際に使われたのは25%ぐらいでした。裏を返すと75%の方は使わなくて、自分で会場等に行かれたというところがあるんですけれども、実際本当に必要だという方々には、お使いいただいたという取組でもあります。

それから、国民1人に10万円という支給がありましたけれども、そのときにおなかの中にいた赤ちゃんにはこの10万円が支給されなかったということなどもありまして、また妊婦さん、もしくは新生児を持つお母さん方のこのコロナの中でも不安というのは大変大きなものでありました。そうした方々に対しての給付ということを鎌倉市独自で行いました。

それから、大変困窮している世帯が増えていくところで、そうした方々を支援する団体に対しての寄附ということを、このガバメントクラウドファンディングを使って募集したところ、想定よりも2倍以上のお金が寄附していただいたということがありました。

それから、これは実際直接にお店の支援です。鎌倉は特に飲食店が多いわけなんですけれども、緊急事態宣言という中では、当初大変経営に苦労されたということがありまして、そういうところを市民の人たちが支援をしたということで、これは行政も側面からの支援をしましたけれども、市民の皆さんが特に中心になって、こうした取組ということも行っていたところです。こちらの宅配マップというところも作成をして、事業者の支援

というところにつなげました。

それから、これは市の独自で、縁むすびカードというものを作成をしまして、市民1人当たり5,000円のカードで使えるというものをお配りをさせていただきました。これは市民の方が市内の事業者を支援をするということで、市内の大きな店舗では使えないんですけれども、小さな店舗で使えるということで、これまでなかなか行かなかったようなお店や、自分が支援したいという、そういうお店で使っていただいたりということで、双方から大変好評をいただいた取組でもありました。

最後になります。鎌倉の共生社会の実現に向けた共創の取組ということを具体的に紹介させていただきます。1つは、障害者2,000人雇用という取組です。これは先輩の取組といえますか、私たちが大変参考にさせていただいたのは、岡山県の総社市の障がい者千人雇用という取組で、今は千五百人雇用というふうに名前を変えておりますが、こうした取組、鎌倉市でも一緒になって取組をさせていただきたいということで進めています。当初1,400人ぐらい働いているというところの推計ですけれども、今、1,600人ぐらいに増えてきているということで、目標の2,000人に向けて、さらなる取組を進めているところです。

農業就労体験セミナー、これはこの後のシンポジウムで、えと菜園の小島さんに事業としては実施をしていただいているものですが、実際に昨年、会社勤めの方が鬱病になって、会社を辞めて、どうしようかというときに、この農業体験に来ていただきました。最初は大変元気がなかったんですが、この農業ということに出会うことによって、自分はこの道をやりたいというふうになって、結果的に今年は藤沢市になりますけれども、農家さんに就職できたという、こんな取組に

もつながっているものです。

それから、鎌倉市の海水浴場では、バリアフリー対応ということでの海水浴場という取組もしています。800メートルのボードウォークなどがあることによって、こうしたこれまで海水浴をしたことがないという方が海水浴場を楽しめるという、こういう環境をつくっているところです。

これは先ほどの動画にも出ましたが、無印良品さん、様々な形で取組を支援していただいています。「いろんなカタチ」という、こうした新聞を市内のNPOの方々が作って、それを情報発信の場として、こうした無印良品さんが協力をしていただいたりということもあります。海藻ポークの取組は、先ほどの動画のとおりでございます。

スマイルフードプロジェクトというのは、先ほどのクラウドファンディングとも重なる部分があるんですが、鎌倉市内で生活が大変困窮しているという方に、月に今、1回程度、この食料を配布をするという取組をやっています。この食料については、鎌倉市内の農家さんですとかお店の方が大変な協力をしていただいて、寄附をしていただいたものを、こうした困窮した市民の皆さんにお配りをさせていただくと。これは、ただ配るだけということではなくて、取りに来た方々にどういう生活の今、お困りごとがあるか、もしくは働く場が求めているのか、そういうことをお伺いする中で、支援につなげていくという、こんな取組をしているところです。

それから、まちの中では、本当にいろいろな取組を市民の方々が自発的にやっただけだということがたくさんあります。鎌倉リビングラボの取組も先ほどの動画で見ていただいたとおりです。

Fab Cityという、ファブラボという取組

なんですけれども、3Dプリンターなどを使って地域の課題を解決する、こんな取組があります。これは既にリタイアしたお年寄りの方が、非常にこの3Dプリンターを上手に使いこなせる方がいらっしゃって、そこには子供たちが本当に目を輝かせながら、そのおじいちゃんに使い方を習いに来るなんていう光景があったりします。

カマコンは、実はこの会場を使ってこれまでやってきているんですけれども、鎌倉の中で何かやりたいという方がプレゼンをして、それをみんなで応援するという、こんな取組も市民で自発的に行われています。

まちの社員食堂、こういうところがまちの中でどんどん広がっているというのも、一つ鎌倉の取組です。

これも鎌倉らしい働き方ということで、右下の写真は建長寺で「寺ワーク」なんていう名称でテレワークをやる場所を開放していただいたりしています。建長寺でこうしたZEN2.0ということで、新しいこうした禅という文化を鎌倉から発信していく取組、これも市民の方たちが中心になって行っている取組です。

こうしたシーンが当たり前にある鎌倉を目指したいということで、鎌倉の取組を紹介をさせていただきました。ご清聴、誠にありがとうございました。